

平成27年度 考古学ゼミナール（考古学連続講座）

考古学から見た

「ゴッホ」事情



神奈川県埋蔵文化財センター

# 考古学から見た「ゴミ」事情



## 🗑️ 日程 ※各講の後に質疑・休憩

開講式	10月17日(土)	13:00 ~ 13:10
第1講	同	13:10 ~ 14:40
第2講	同	15:00 ~ 16:30
第3講	10月24日(土)	13:00 ~ 14:30
第4講	同	15:00 ~ 16:30
第5講	10月31日(土)	14:00 ~ 16:00
修了式	同	16:20 ~ 16:30

## 🗑️ 要旨集 目次

●講師紹介	・・・1
●講義要旨	
第1講 ゴミからさぐる旧石器時代の遺跡	・・・2
公益財団法人 千葉県教育振興財団 田村 隆	
第2講 ゴミは食生活に関する情報の宝庫	・・・5
山梨県立博物館 植月 学	
第3講 縄文貝塚に見るモノの再利用	・・・9
市立市川考古博物館 領塚 正浩	
第4講 江戸の町のゴミ事情	・・・14
早稲田大学教授 谷川 章雄	
第5講 考古学から見たごみ問題	
—ごみ捨て場は宝の山?— (総論)	・・・18
早稲田大学名誉教授 菊池 徹夫	

---

会場 かながわ県民センター 2階ホール  
横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2

イラスト 萩谷光子

## 講師紹介

### 田村 隆(たむら たかし)

公益財団法人 千葉県教育振興財団 上席文化財主事

主著：『旧石器社会と日本民俗の基層』（同成社）

専門 旧石器考古学

### 植月 学(うえつき まなぶ)

山梨県立博物館 学芸員

主著：「低地における貝塚形成の多様性からみた中里貝塚」『ハマ貝塚と縄文社会～国史跡中里貝塚の実像を探る～』（雄山閣）、「骨塚の形成から見た大型獣狩猟と縄文文化」『季刊考古学』別冊 21 141-148（雄山閣）、「出土馬遺体研究の現状－東日本を中心に」『BIOSTORY』21（誠文堂新光社）

専門・今取り組んでいること 専門は動物考古学。特に日本列島における牛馬の歴史と、縄文時代の生業と環境に関心がある。

### 領塚 正浩(りょうづか まさひろ)

市立市川考古博物館 副主幹（学芸員）

主著：「二次利用または転用された遺物について－物質文化の多様性を探る」2010『房総の考古学』（六一書房）、「歴史コラム 縄文時代の廃物利用」2015『図説市川の歴史（第二版）』（市川市教育委員会）

専門・今取り組んでいること 専門は、縄文時代の考古学。縄文集落（貝塚）を取り巻く環境の復元や再利用（二次利用）の考古学に関心を寄せる。

### 谷川 章雄(たにがわ あきお)

早稲田大学人間科学学術院教授

主著：『六道銭の考古学』（共編著）（高志書院）、「考古学からみた近世都市江戸」『史潮』新 32（歴史学会）、「江戸の生活史と考古学」『民衆史研究』57（民衆史研究会）

専門 近世都市江戸の考古学、近世墓制・葬制の考古学

### 菊池 徹夫(きくち てつお)

早稲田大学名誉教授、福島県文化財センター白河館「まほろん」館長

主著：『はじめての考古学』（朝日学生新聞社）、『考古学の教室』（平凡社新書）

専門・今取り組んでいること 比較考古学、北方考古学、縄文文化世界遺産登録推進事業、福島の子供たちの心の復興のお手伝い

## ゴミからさぐる旧石器時代の遺跡

田村 隆 (公益財団法人 千葉県教育振興財団)

後期旧石器時代の遺跡を掘ると、石器や礫の破片が出土する。石器や礫片の分布密度には粗密があることが知られている。こうした遺物の出土状況にはいろいろな説明がされてきた。ある人はイエのあったところには遺物が集中していると考えた。別の人は、そこは当時の人々がおこなった種々の仕事の痕跡だと主張した。いやいや、そこは不要となったものを捨てたところだという意見もある。

このように種々の解釈が出され、なかなか決着をみなかったのには理由がある。旧石器時代の人の行動を具体的にモニターすることが難しい、否、そんなことは不可能だからである。そこで、改善の策として、旧石器時代と類似した生活を送っている人々—現代の狩猟・採集民たちの行動を観察することにより、失われた光景を何とか再現できないものか、という見通しが提示された。この方針に沿って、世界各地で民俗(族)誌的な調査がおこなわれてきた。

狩猟・採集民といっても、そこにはいろいろな生活様式がある。特に参考になるのは、わが国の後期旧石器時代の人々と同じように、頻繁に移動を繰り返している集団の記録である。例えば、アフリカ南部に居住するクン族や、オーストラリア中央部に居住するアリャワラという集団がある。彼らは、短い場合では数日、長くても数か月ごとに居住地を移動する生活を送っている。彼らの生活記録と、移動後に残された生活痕跡の記録は、私たちにかげがえのない情報を与えてくれる。また、アラスカの狩猟・採集民である、ヌナミウト族の記録も重要な比較資料となる。

もちろん、そうした現代世界の民俗(族)誌的な記録と、後期旧石器時代の遺跡に残された生活痕跡を直接比較することはできないが、重要なヒントを与えてくれることは確かである。それほどのようなことなのだろう。まず指摘されるのは、遺跡から出土する石器と礫の大半は、生活廃棄物であるという事実である。次に、生活廃棄物がどのような残され方をしているのか、そこに何らかの共通するパターンはないのだろうか、ということが問題になる。クン族やアリャワラ集団など移動性の高い狩猟・採集民の廃棄物のあり方には、動かしがたい共通性が認められるのである。

まず、彼らの居住している場所(以下キャンプという呼び方をする)には共通する構造が存在する。これが廃棄物観察の出発点となる。キャンプは、①小屋掛けあるいはシェルター(雨風をしのぐための施設であり、居住者が休息し、睡眠をとるためのスペースである。核家族を中心とする世

帯が占有することが多い)、②屋外炉(暖をとったり、調理したり、人々の談笑の場であり、仕事場の焦点となる)、③共同作業の場(各世帯の人々が共同で作業したり、舞踊や祭りの場でもある)、という①小屋掛け-②炉-③共有エリアという三者から構成されている。

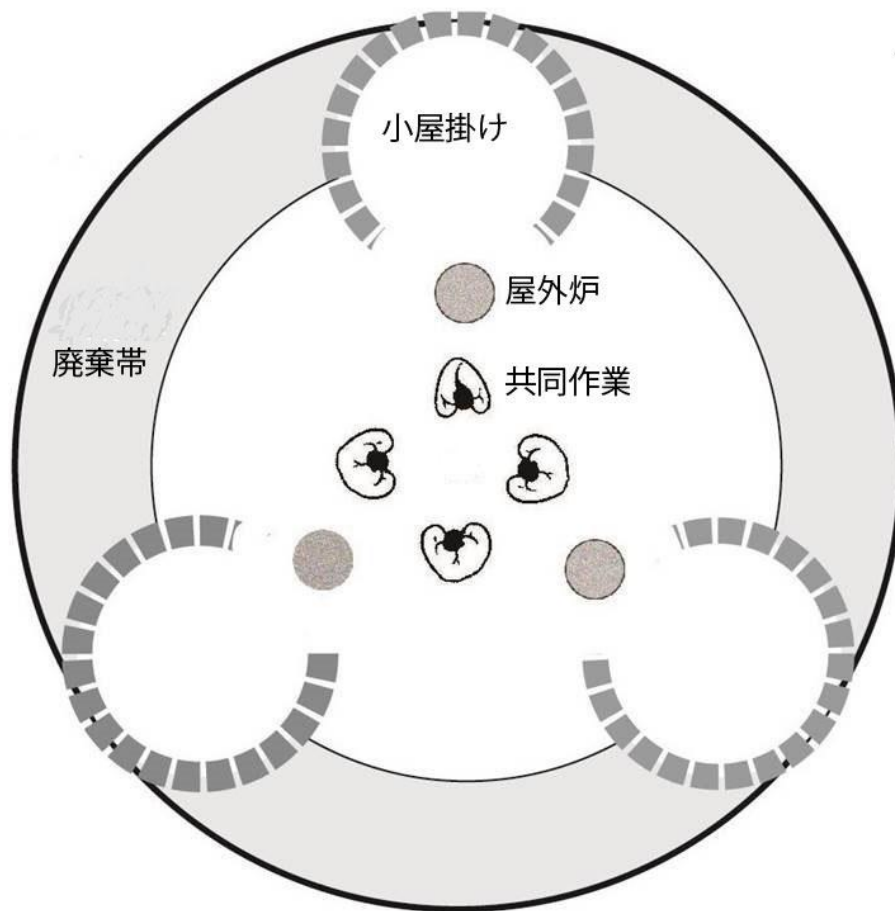
次に、このキャンプの三層構造と廃棄物との関連を考えてみたい。まず、①小屋掛けであるが、小屋掛けの内部には大型の廃棄物は分布しない。生活に必要な家財道具は、移動と共に次のキャンプに持参される。そこに分布するのは、非常に小型の廃棄物である。道具の補修に際してでる削りカスや、食べ物の断片などが残される。従って、遺跡の遺物集中場所を住居跡と考えることは誤りであることがわかる。

②屋外炉のまわりには様々なものが散らばっている可能性がある。いろいろな作業が次々におこなわれたため、廃棄物の内容と作業内容とは対応しなくなる。仕事をする時に生じる廃棄物は、小型のものはその場に留まるが(ドロップ・ゾーンの形成)、大きめのもの少しはなれたところに投げ捨てられ、廃棄物帯(トス・ゾーン)がつくられる。さらに、重要なのは、どの狩猟・採集民も、炉辺に散らばった廃棄物を清掃し、少し離れた所に寄せ集めることである(寄せゴミ)。誰でも汚れたところで仕事をするのは愉快でない。この際に、トス・ゾーンの特定か所にゴミが掃き寄せられる。以後ここにゴミの集積が反復され、廃棄物帯(置きゴミ)が形成される(ゴミはゴミを呼ぶ-ゴミの磁石効果という)。

③共同作業の場には、各世帯共同でおこなわれた作業に伴う廃棄物が残される。特に、狩猟・採集民の場合、食料資源は私物化されず、皆に分配されるため、獲物の解体はこの場でおこなわれ、肉や内臓が各世帯に配られる。この場合も、解体・分配の場は清掃を反復され、ゴミは廃棄帯に移動する。このように、遺跡の遺物集中場所と特定の行動とを対応させることもできない。

民俗(族)誌的な観察結果から明らかなように、キャンプに廃棄帯-ゴミ捨て場が形成されるのは、キャンプが比較的長期間維持された場合に多い。また、キャンプを構成する世帯数が増加するにつれて、廃棄帯-ゴミ捨て場も固定化され、大型化し、さらに、ゴミの種類も増加する。加えて、狩猟・採集民の移動パターンも廃棄物の形成に大きな影響を及ぼす。

後期旧石器時代の人々のキャンプも、その環境によっていろいろな変化があったに違いないが、ここでえられた基本構造をもち、廃棄物の形成過程も共通していたにちがいない。最後に、いかなる廃棄物も、人為的な(c変換)、あるいは自然作用による攪乱(n変換)を免れないことを指摘しておく。地表に散在する石器や礫は、拾得され再利用された。また、どのキャンプにもいた子どもたちにとって、廃棄物帯はおもちゃ箱なのである。



狩猟・採集民キャンプの基本構成

## ゴミは食生活に関する情報の宝庫

植月 学 (山梨県立博物館)

### はじめに

考古学者の多くは人工遺物を専門にしています。特に日本の考古学者には土器の研究者が多いようです。縄文時代以降の遺跡から出土する遺物の圧倒的多数は土器のかけらですので、これはある意味当然と言えます。土器や石器はいわば「燃えないゴミ」で残りやすいのです。

私が専門としている動物骨や貝殻はいわば「燃えるゴミ」、あるいは「生ゴミ」に相当します。自然遺物は貝塚や低湿地など、保存条件の良い限られた遺跡でしか出土しません。このような理由から、かつては遺跡の調査においてもさほど重視されていませんでした。しかし、最近では調査者の問題意識の変化により、調査時に回収のための努力が続けられた結果、検出量は年々増加しています。本講座では、生ゴミから過去の食生活を探る方法について実例をもとにご紹介します。

### 1. 縄文時代のゴミ形成過程を探る

縄文時代の終わり頃(晩期)の関東地方に「骨塚」と呼ばれる特徴的な遺構が形成されます。「貝塚」が貝を主体とするのに対し、その名の通りシカやイノシシの「骨」が密集して堆積する特殊な遺構です。千葉市六通貝塚の骨塚を分析したところ、獣骨の観察から以下のような形成過程が明らかになりました。

獣骨(シカ・イノシシ)の多くには炙った痕が見られました。その部位と位置から、縄文人は骨を炙って割りやすくした後、骨髓を取り出したようです。廃棄後の骨には海綿質の部分を中心に、まだ脂質などの栄養が残っています。そこをイヌたちが盛んにかじり、イヌも食べなかった部分だけが最終的にゴミとして残されました。我々動物考古学者は、イヌすら見向きもしなかった骨を研究対象としていた訳です。

以上の結果から骨塚の性格についての手がかりが得られます。骨塚は大型獣だけが密集して出土するという状況から、祭祀の場という解釈もあります。しかし、時間をかけて骨髓までを徹底利用している点からは、むしろ処理に時間をかけられる集落であったとみなすべきでしょう。

骨塚が形成された縄文時代晩期は集落遺跡が激減し、人口が減少していた時期と考えられます。この時期に貝塚の形成が低調となり、大型獣(シカ、イノシシ)の狩猟が盛んになった背景には、人口減少に伴う捕獲圧の緩和に伴い、貝類や小魚よりもリターンの大きい大型獣に食料をシフトし

ていったという生業の変化があると考えています。

## 2. 内陸への海産物流通を探る

学生時代は縄文時代の貝塚ばかり研究していた私ですが、縁あって内陸の山梨に就職することになり、貝や魚の考古学とは縁遠くなってしまいうだろうと予想していました。ところが、一つの遺跡との出会いが新たな研究テーマへの道を開いてくれました。それは富士川沿いに位置し、江戸時代から近代にかけて、富士川水運の拠点となった鰍沢河岸の跡です。この遺跡から出土した骨を分析させていただいたところ、マグロやサメなどの大型魚類や、イルカが多く消費されていたことが明らかになりました。

ちょうど同じ頃、山梨県民はマグロ消費量が全国トップクラスという話を耳にし、そのルーツを探ってみようと思いました。山梨への海産物の主な供給源である静岡県沼津市などでお話を伺ったところ、江戸時代から昭和の初め頃までは駿河湾でも大量のクロマグロが揚がっており、その多くが近隣の山梨や長野に出荷されていたことがわかりました。現在に連なる山梨県民のマグロ好きのルーツはこの辺にあるようです。

最近では甲府城下町や都留市の谷村城下町など、他の近世遺跡から出土した動物遺体の調査もおこなわれています。両遺跡でも多くの海産貝類や魚類が出土しています。江戸時代も後半になると、内陸の甲斐国でもかなり流通条件が整ったことが窺えます。ただ、城下町では武家が好んだタイや、小型魚が多く、静岡県に近くより流通条件の良い鰍沢河岸とは異なる様相も見えてきました。

## 3. 肉食習慣の変化を探る

日本人は仏教伝来とともに殺生を忌避するようになり、肉食も低調となっていったという見方がかつては一般的でした。しかし、最近の文献史学の研究ではこうした定説への見直しも進んでおり、時代や地域によって様々な肉食習慣が存在したことが論じられています。

動物考古学では故・松井章氏が古代から近世まで牛馬の屠畜や肉食に関わる問題に先鞭をつけられました。私も最近、千葉県谷津貝塚から出土した奈良時代の牛骨調査をきっかけに、牛肉食が盛んに行われていたのではないかと考えています。というのも、この遺跡で出土したウシは3歳前後で死亡している個体が多いと推定されたのです。役畜や乳牛の用途にしては、あまりにも若過ぎ、むしろ食用とするのに適した年齢です。そのような目で古代の文献を見ていくと、牛肉食に関する記述は意外と多いのです。

多摩市の上っ原遺跡の牛骨には縄文時代の骨塚のシカ骨と同じように、骨髓の多い部位を炙って割った痕跡が確認されました。この場合は食用だけでなく、革なめしに骨髓を使った可能性もあります。いずれにしても、骨髓抽出に先立って解体された牛は食べられたのではないのでしょうか。

その後、中世末に訪れた外国人宣教師が日本人は家畜の肉を食べることをもっとも忌み嫌うと書き残しているように、少なくとも文献に残るような上流階級の食からは牛馬肉食は姿を消します。



しかし、シカの骨は中世や近世城郭ではよく出土しますので、肉食すべてがなくなった訳ではありませんでした。一方で、ハレの日のお膳の献立を見ると、四つ足の獣の肉は決して使われていません。肉食の実態は階層によっても、また食事の場面によっても異なっていたのです。

江戸時代も終わりに近づくと、薬喰いなどと称して肉を食べようになり、獣肉を提供する店も増えます。西洋文化を積極的に取り入れるようになった明治時代には、各地に牛肉屋ができました。しかし、江戸時代までは肉食はおおっぴらに行われることの少ない習慣で、文献には記録されにくく、考古学の果たす役割が大きい分野と言えます。

## おわりに

仮に何らかの理由で現代のすべての文字や映像情報が消滅、あるいは解読不能になったとしたら、将来の考古学者（もしかしたら人類ではないかもしれませんが！）は現代の食生活をどうやって復元するでしょうか？食卓に並ぶ骨をきれいに除去された肉・魚、遠く世界中から運ばれた食材。生ごみは焼かれ、あるいははるか遠方のゴミ処理場へ運ばれます。食生活を復元しようとしても途方に暮れてしまいそうです。

ほんの百年ほど前までであれば、日本でもゴミから食生活をかなり調べることができます（少なくとも動物については）、この数十年で我々が経験した食生活の変化がいかに劇的なものであるかがわかります。そして、このような環境に多大な負荷をかける食生活がいつまで持続可能なのか疑問も湧いてきます。

考古学は数千年のスパンで食資源の利用変化を議論できる学問です。長い歴史に照らしてみると、現在の食生活の特異さが見えてきます。考古学は古代のロマンを追い求めるだけの学問ではなく、現在の暮らしを見つめなおし、未来を考えるためのヒントも提供してくれるのです。



脛骨

中手骨

大腿骨 近位端

大腿骨 近位端

図1 千葉市六通貝塚から出土したシカ骨に見られるイヌの炙り痕（左）と咬み痕（右）



図2 山梨県鯨沢痕から出土したマグロ（左）とイルカ下顎（右）

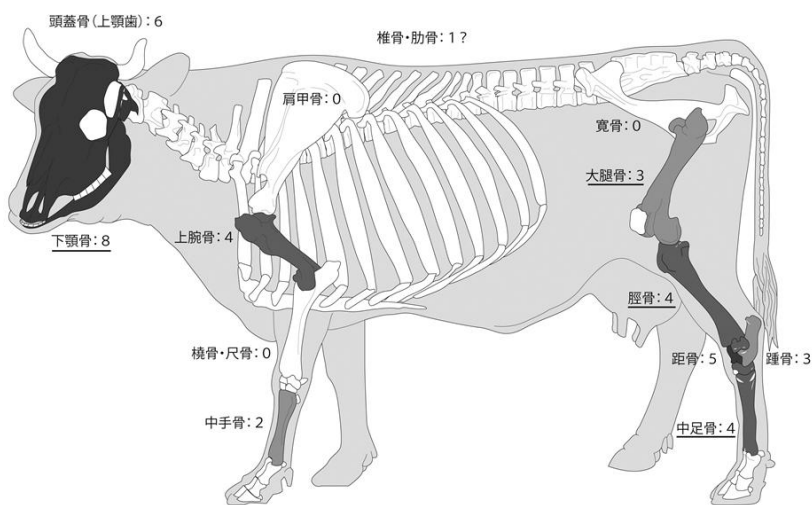


図3 多摩市上っ原遺跡から出土したウシ骨の部位  
骨髄を多く含む部位だけが出土している

## 縄文貝塚に見るモノの再利用

領塚 正浩 (市立市川考古博物館)

### 1. 遺物の再利用

地下に眠る遺跡からは、多様な遺物が出土します。こうした遺物をよく観察すると、ある目的のために利用または入手されたにもかかわらず(一次利用)、その後に異なった目的のために、再利用(二次利用)された遺物が一部に含まれていることに気がきます。考古学者の関心が低いことや時代(時期)や地域によっては、目立って出土しないこともあり、こうした遺物を正面から取り上げた研究や論文は、残念ながらほとんどありません。今回の発表では、千葉県市川市にある縄文時代の貝塚から出土した遺物のうち、再利用(二次利用)された痕跡がある遺物にスポットを当て、その意味するところを考えてみたいと思います。

### 2. 土器片

市川市の北部には、台地や段丘上を中心に縄文時代の貝塚が55ヶ所ほどあります。これらの貝塚は、縄文時代早期から晩期にかけて形成されたもので、再利用された遺物は、このうち前期から後期にかけて多く出土します。まずは、このうち最も出土点数が多い土器を再利用した事例を紹介したいと思います。市川市内では、中期後半の貝塚を中心に土器を再利用した漁撈用の土錘が出土します。中期後半の向台貝塚からは、破損または破壊した土器をさらに打ち欠き、楕円形になるように形を整え、場合によっては破断面を研磨し、長軸方向の2ヶ所に紐掛け用の溝を刻んだ土錘(第1図)が約700点出土しています。興味深いことに、これらの土錘には前期前葉の土器片を再利用したものが10点ほど含まれていました。しかしながら、前期前葉には土器片利用の土錘がほとんどないこと、形状・大きさ・重量が中期後半の土錘に近いことから、中期の縄文人が前期の土器片を再利用して、土錘を製作した可能性が高いことがわかりました。縄文人たちにとって、足元に散布する土器片は「原材料」のようなものだったのかもしれない。

### 3. 埋甕炉

中期後半の竪穴建物跡からは、しばしば床面の中央部付近から下半部を打ち欠かれた1個体分の縄文土器が埋設された状態で出土し、土器の内部に焼土や灰が見られることから「埋甕炉」と呼ばれています。第2図に今島田貝塚の埋甕炉を2例あげました。1は、波状口縁を呈する阿玉台式の

深鉢を再利用したのですが、高低差の大きい波状口縁が嫌われたために、口縁部を下にした状態で炉体に使用されていました。2 は、加曾利 E I 式の深鉢を再利用したもので、口縁部を上にした状態で炉体に使用されています。埋甕炉としては最もポピュラーなものです。炉の縁取りに土器片を利用した炉（土器片囲炉）や一部に自然礫を多く含んだ炉もありますが、大きな自然礫からなる石囲炉のようなものはありません。第 3 図は、中期後半の平作貝塚で確認された竪穴建物跡の土器片囲炉と炉内から出土した深鉢です。炉内とその周辺からは磨石・敲石や石皿の破片も僅かに出土しています。

#### 4. 石 器

中期後半の向台貝塚や後・晩期の堀之内貝塚からは、再利用された磨製石斧・打製石斧・石皿・石剣などが出土しています。第 4 図は向台貝塚から出土した石器です。1 は、物を切るためのスクレイパーですが、石器の表面に平滑で光沢のある部分が残っているので、石皿の破片を再利用したことがわかります。2 は、片面が平滑で 1 ヶ所に凹みがある緑泥片岩製の打製石斧で、石皿の破片を再利用したものと考えられます。3～5 は磨製石斧です。木を切るための磨製石斧は、先端が磨耗したり、破損して使用できなくなると、木の実を加工するための磨石・敲石、骨角器をつくるための砥石などに再利用されました。市川市の周辺には適当な石材の産地がないことから、石鏃など小型の石器を除いては、石器製作時の剥片や砕片が遺跡から出土することはまずありません。製品の形で入手された石器が圧倒的に多いこと、生産地周辺の遺跡と比較して、石器が再利用される頻度が高いことがこの地域の大きな特色になっています。また、石剣は祭祀や儀礼に関わる石器と考えられていますが、国史跡の堀之内貝塚からは、その破片を打製石斧として再利用したものが出土しています。こうした事例は、祭祀や儀礼に関わるような石器であっても、目的が達成されると、道具としての機能がリセットされ、「原材料」のようなものに転化することを示しています。縄文人の世界観を考える上で注目すべき事例といえます。

#### 5. 動物遺体

縄文人たちは、食用の目的で入手した動物の身体の一部を使って、道具や装飾品などを製作することがありました。第 5 図は、中期後半の向台貝塚から出土した骨・角・牙・貝器です。1～3 は鹿角やイノシシ・ニホンジカの四肢骨でできたヤス状刺突具、4 はイノシシの牙でできた玉、5 はニホンジカの四肢骨でできた針あるいは髪飾り、6～11 はハマグリ・カガミガイ・イタボガキ・アカニシなどの貝殻を素材とした篋形貝器・貝刃・貝輪・磨耗貝器です。これらの道具や装飾品の多くは、食用の目的で一次的に入手した動物の身体の一部を加工し、再利用したものと考えられます。自然死あるいは病死した動物の一部、自然に落角した鹿角などを利用したとすれば、再利用には該当しませんが、その判断には困難がともないます。東京湾沿岸の縄文人たちは、世代を超えた強い規範のもとで、ムラ(集落)の一部に貝類や獣類などの食物残滓をはじめ、破損した土器や石器

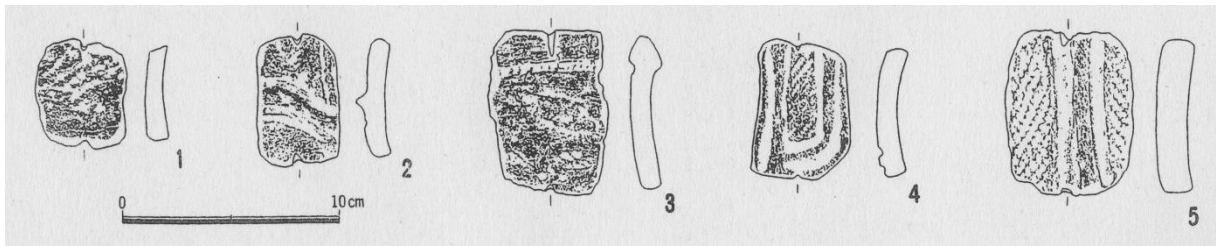
などを集積し続け、環状あるいは馬蹄形を呈する貝塚を形成しました。貝塚に集積された貝殻をはじめとする膨大な遺物は、ムラ(集落)をシンボリックなものにしていたので、集積された遺物は、ある意味「再利用」の産物ともいえるのではないのでしょうか。環状あるいは馬蹄形の貝塚は、縄文人たちのムラ(集落)であるとともに、埋葬人骨が出土する墓地でもありますので、遺物や人骨が集積された空間は、「再生を願って役目を終えたモノやヒトを集積した送り場」と表現することもできます。現代人の世界観からすると、こうした貝塚は「ゴミ捨て場」や「墓地」と一体化した「ムラ(集落)」に見えますが、私たちとは異なる縄文人たちの世界観がそこに凝縮されているのです。

## 6. まとめ

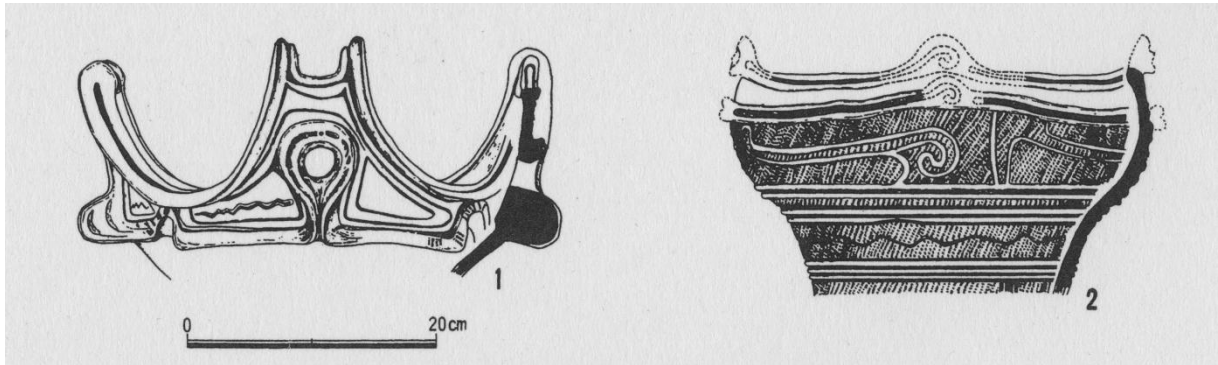
再利用(二次利用)された遺物については、既にエドワード・S・モールズ氏が『SHELL MOUNDS OF OMORI』の中で言及しており、坪井正五郎氏や江見水蔭氏らがこれに続きましたが、その研究が戦後に継承されることはありませんでした。私たちは、何時しか大量生産・消費社会と表裏一体の「使い捨て文化」に埋没し、その結果、モノの再利用という問題に無関心になってはいないのでしょうか。モノの再利用は、時代を問わない通時的なヒト(人間)の行動様式ですから、そのことに注目した研究は意義のあることですし、考古学研究上の一分野をなすものともいえます。再利用された遺物は、時代(時期)や地域によって出現頻度が異なっていますが、それらを体系的に整理することができれば、製作→使用→廃棄といった単純な図式に留まらない、ヒト(人間)が生み出した物質文化の多様性を明らかにできます。また、将来的には国外の事例と相対化することにより、これまでとは違った視点に立って、モノの再利用に関する日本の物質文化の独自性を明らかにできるかもしれません。

## 引用・参考文献

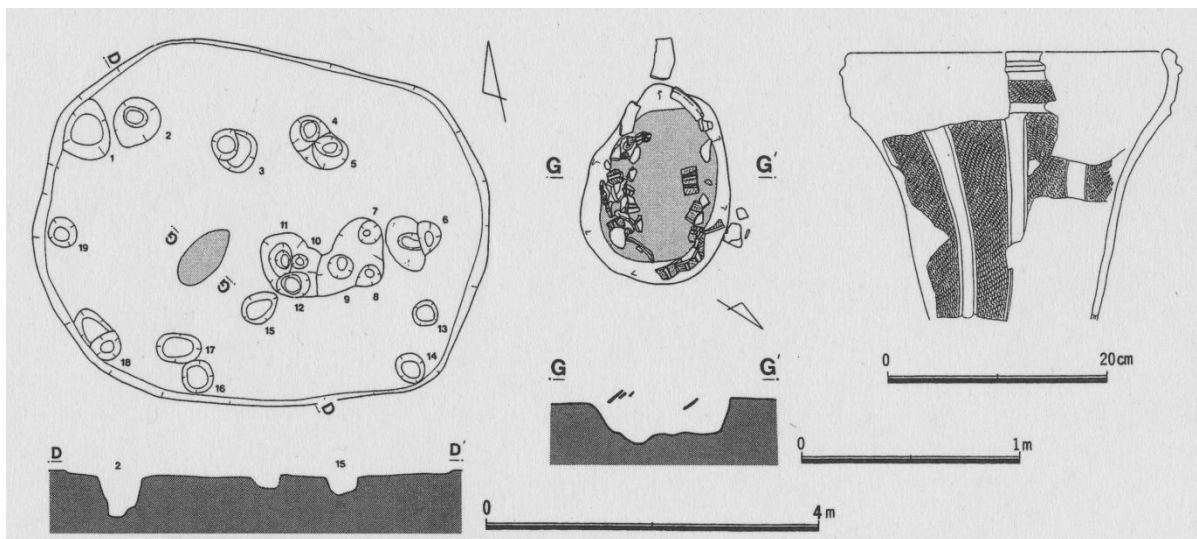
- 江見水蔭 1911「太古の廃物利用」『日曜画報』第1巻第13号 博文館
- 熊野正也 1966『今島田遺跡』市川市文化財調査報告第1集
- 斉藤忠昭ほか 1988『昭和62年度市川東部遺跡群発掘調査報告』市川市教育委員会
- 坪井正五郎 1894「貝塚土器に於て見る所の廃物利用の数例」『東洋学芸雑誌』第151号 東洋学芸会
- 堀越正行・領塚正浩ほか 1992『堀之内貝塚資料図譜』市立市川考古博物館研究調査報告第5冊
- 堀越正行・領塚正浩ほか 1999『向台貝塚資料図譜』市立市川考古博物館研究調査報告第7冊
- 領塚正浩 2010「二次利用または転用された遺物について」『房総の考古学』六一書房
- Edward S. Morse 1879『SHELL MOUNDS OF OMORI』MEMOIRS OF THE SCIENCE DEPARTMENT, UNIVERSITY OF TOKIO, JAPAN



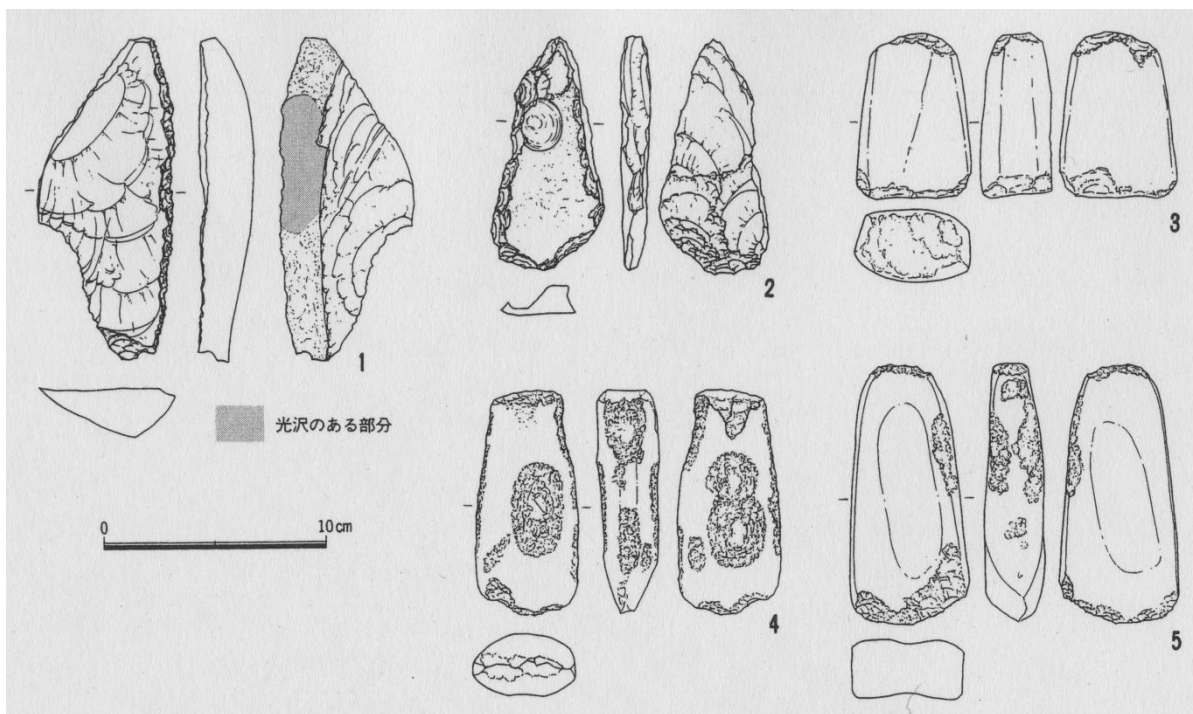
第1図 向台貝塚出土の土器片土錘 (堀越・領塚ほか 1999)



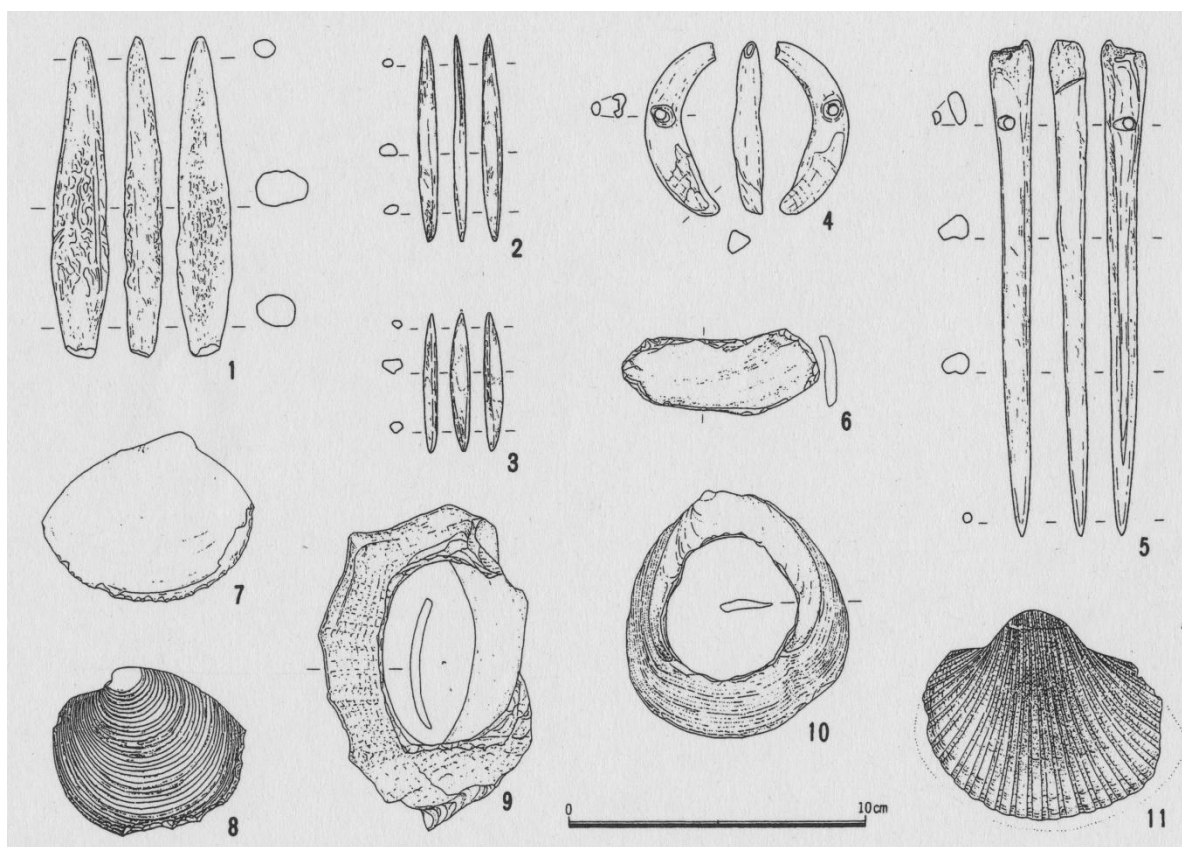
第2図 今島田貝塚出土の炉体土器 (熊野 1969)



第3図 平作貝塚の竪穴建物跡・土器圜炉・炉内出土土器 (斉藤ほか 1988)



第4図 向台貝塚出土の石器（堀越・領塚ほか1999）



第5図 向台貝塚出土の骨・角・牙・貝器（堀越・領塚ほか1999）

## 江戸の町のゴミ事情

谷川 章雄（早稲田大学教授）

### 1. 江戸のゴミ処理とリサイクル

東京都千代田区丸の内一丁目遺跡（第2次）の寛永13年（1636）以前の江戸城外堀からは、ゴミとして捨てられた遺物が大量に出土した。堀内堆積物の分析によって、外堀は淡水域で水はけの悪い沼沢地のような水域環境にあり、水質は有機汚染のすすんだ富栄養な状態にあったことがわかった。これは初期江戸の人々が堀にゴミを捨てていたことを示している。

幕府がゴミ捨てを禁止したのは、明暦元年（1655）の「町中の者、川筋へはきだめのゴミ捨て申すまじく候」という町触である。この頃から江戸のゴミ問題が深刻になり、幕府が関心を示し始めたと考えられる。幕府のゴミ捨て禁止は、その後も寛文元年（1661）に武家の「御堀近辺の面々」に対して「御堀」へちりあくたを捨てることを禁じ、さらに「御堀」「町中の川筋」「町屋の入堀」「裏々の大下水」「明会所」などにゴミ捨てを禁じる法令が再三出された。ということは、これら一連の法令の実効性はあまりなかったと思われる。

町人地のゴミ処理システムは、明暦元年（1655）にゴミを船で永代島に捨てに行くことを命ずる法令が出され、試行錯誤の末に延宝9年（1681）に収集・運搬・処分という三過程に分離したシステムが完成した。一方、武家屋敷のゴミ処理は町人地とは異なり、大名屋敷では出入り百姓が行っていたことがわかっている。

しかしながら、江戸遺跡では廃棄された地下室やゴミ穴などの遺構から、ゴミとして捨てられた遺物が大量に出土しており、ゴミ処理システムが完全に機能していたわけではなかった。新宿区三栄町遺跡からは巨大なゴミ穴が検出されたが、近隣の坂町遺跡でも同種のゴミ穴が検出されており、これらはゴミを船で搬出できなかった四谷地域の特殊性かもしれない。

また、江戸はリサイクル都市であったと言われているが、こうした江戸遺跡から出土するゴミとして捨てられた遺物を見ると、そのイメージを多少なりとも修正する必要にせまられる。ただし、江戸ではリサイクルが全く行われなかったのではなく、出土金属製品の少なさから言えば、一部のリサイクルは盛んであったと言えよう。



## 2. 溜池の水質汚染

江戸のゴミ問題は堀や池の水質汚染を引き起こした。千代田区溜池遺跡の発掘調査によってそうした水質汚染の実態が明らかにされている。

溜池遺跡の堆積物の分析から、中世の水田の時代以降近世に入ると、堆積物がシルト層に急激に変化し、シルト層からは水田耕作が裏づけられないこと、珪藻化石群集からは中下流域から最下流性河川種群が優先する短い期間を経て、腐水種群が優先する時代へと移行することが明らかになった。これは中世の水田が近世になって池沼的環境に人為的に改変されたものと考えられている。

そして、近世の水質汚染にほぼ対応するように、溜池にはナス属・メロン仲間・ゴマ・ソバ・キュウリなどの種子のような衣食住に関連するゴミや周辺の植栽林に由来するゴミの流入が認められるような多少なりとも栄養化した水質環境へ変化していった。そして、マツ属複雑管束亜属とともに多種の針葉樹や広葉樹、カタバミ属・ナデシコ科・アカザ属・ヒユ属など路傍の雑草が現われ、サイカチ属近似種とされるマメ科植物やキリの植栽も認められたという。

文献資料によれば、慶長 11 年（1606）、浅野幸長が甲州の人夫を使って、虎ノ門で滝になって流れ落ちていたところに堤を築き、溜池とした。その後、寛永 13 年（1636）の江戸城外堀普請のときに赤坂門の縄張りが決定し、喰違土橋と赤坂門の間の弁慶堀と溜池の形態が最終的に確定した。また、寛永 21 年（1644）、溜池を水源としていた「赤坂之水道破損」のため、修復に普請奉行 2 名が指名されたことが「幕府祐筆日記」に見えている。すなわち、1640 年代までは溜池の水は上水に使用できるような水質であったことがわかる。

したがって、溜池の水質汚染とゴミの流入の時期は 17 世紀後半のことであり、これは溜池沿岸の低地の土地利用の活発化と深く関わっていたと考えられる。なお、この水質汚染によって溜池は上水の水源には使われなくなり、承応 3 年（1654）に多摩川の羽村という遠隔地から取水する玉川上水が完成する。

## 3. 下水の整備

江戸の堀や池の水質汚染の問題は、下水の整備とも関わっている。

江戸の町屋の下水は、中央区日本橋一丁目遺跡（日本橋万町）の 13 面（17 世紀前葉～中葉、1630～40 年代頃か）から穴蔵や上水などとともに下水の遺構が検出されており、この時期にはすでに下水が整備されていたことがわかる。町々の下水を集める大下水は新宿区市谷・四谷などで発掘されている。また、尾張藩上屋敷などの大名屋敷にも下水があった。

下水に関する町触の初見は正保 5 年（1648）であり、この時期は道路管理としての下水という認識であった。延宝 6 年（1678）に下水の管理が強化され、生活問題としての下水という位置づけに変化したという。生活問題とは堀や池の水質汚染に他ならない。

#### 4. 江戸の開発と環境

ここでは江戸のゴミ処理、下水の整備を含む、江戸の開発と環境の問題を考えてみることにしたい。

寛永 13 年（1636）の外堀の天下普請を最後に江戸城の普請は終了し、それとともに初期江戸の市街地の形成も一応終わったと考えられる。初期江戸の上水が設置され、寛永年間（1624～1644）には神田上水が完成する。初期の下水も整備されたのであろう。この時期に初期江戸が完成したと考えられる。

17 世紀後半になると、ゴミの不法投棄や堀や池の水質汚染が問題となり、承応 3 年には（1654）多摩川の羽村から取水する玉川上水が完成した。

一方、明暦 3 年（1657）の大火によって初期江戸の町は消失し、再開発された江戸の町は拡大していく。延宝年間（1673～1680）には下水の管理が強化され、道路管理としての下水から生活問題としての下水に位置づけが変化するのである。また、この時期は江戸の町人地のゴミ処理システムが完成した時期でもあった。

#### 5. 発掘されたゴミから何がわかるか

新宿区市谷仲之町遺跡では、天和 4 年（1684）にこの地を拝領した旗本玉虫家（300 俵 10 人扶持）の屋敷が発掘された。幕末の玉虫家屋敷の居住者を過去帳などで推定すると、当主 2 代目力太郎、妻、母、子供（男子）3 人、家来 1 人、先代当主の妾の合計 8 人で、玉虫家の菩提寺に葬られた家来 1 人を含め、おそらく家来や下男・下女は 2～3 人はいたと考えられている。

こうした旗本玉虫家屋敷の居住者が廃棄した生活用具のうち、屋敷引き払いに際して不用品として捨てられたと考えられる遺物が発掘された。これは土中であって腐らないものであり、当時の生活用具の一部にすぎない。稀少性の高いものは伝世し、逆にありふれた日常の生活用具は簡単に捨てられることが多いので、その大部分は安価な日常の生活用具であろう。

以上の点を踏まえて、改めてその遺物を見ると、碗・皿・鉢などの飲食器の種類と数量が多いことに気づく。中瓶・大瓶とした高田徳利も多いが、これは本来酒などの通い徳利に用いられ、取り置かれて様々な用途に転用されたものであろう。また、火鉢・火消壺などの暖房具、灯明皿・灯明受皿・灯明台・カンテラなどの灯明具や植木鉢が目立っている。このような遺物のあり方は、江戸の旗本屋敷の生活用具の一端を物語るものであった。

江戸遺跡の発掘調査では、大量の遺物がごみ穴や使われなくなった地下室などに廃棄された状態で出土することが一般的であるが、これは江戸のモノの使用・廃棄のサイクルが短かったことを示している。その背景には、江戸が巨大な消費社会であり、多量なモノがあふれていたこと、災害や人の移動が頻繁にあったために、モノが捨てられる機会が多かったことなどが考えられる。また、江戸遺跡の出土遺物のなかに生産・生業に関するものがほとんど見られないことも、都市の生活用具の特徴であろう。

森本伊知郎氏は、武州生麦村の名主関口家の代々当主が記した『関口日記』の寛政8年（1796）から弘化2年（1845）までを対象に、生活用具に関する記事の分析を行なった。それによると、購入件数は桶・盥などの木製品、碗・皿や播鉢・土瓶などの陶磁器、金属製品の順で多く、桶や釣瓶などの木製品は補修されることが多い。陶磁器の購入数と購入頻度については、一括購入しその前後にも頻繁に購入する碗・皿などと、1, 2点ずつ10~20年おきに購入する土瓶や播鉢などに分類できる。また、関口家で購入した陶磁器と遺跡出土陶磁器を比較すると、碗類が最も多く、次いでその他の供膳具が見られ、加工・調理具は少ないという点で共通しているという。こうした日記の記事の分析と、前述の1戸の家の生活用具の種類・数量、財産目録や家財目録、考古資料による生活用具の復元結果を重ね合わせることによって、耐久財・消費財などを含む生活用具のあり方と動態を認識することが可能になるとと思われる。

これは江戸のゴミとして捨てられた遺物からわかる世界の一部に過ぎない。近世都市江戸の人間とモノとの様々な関係をそこから読み取ることができるのである。

## 参考文献

- 谷川 章雄 1993 「考古学からみた近世都市江戸—考古学と歴史学の関係をめぐって—」『史潮』新32 歴史学会
- 谷川 章雄 1999 「江戸の生活史と考古学」『民衆史研究』57 民衆史研究会
- 谷川 章雄 2010 「近世考古学と民俗学」『比較考古学の新地平』同成社
- 塚本 学 1993 「江戸時代人の持ち物について」『特別展「江戸のくらし」—近世考古学の世界—記念講演・座談会報告書』新宿区教育委員会
- 榎木 真 1992 「市谷仲之町遺跡の遺構・遺物と居住者について—文献史料と考古資料を概括して—」『市谷仲之町遺跡Ⅱ』
- 森本伊知郎 1995 「陶磁器にみる発掘資料と文献史料」『季刊考古学』53 雄山閣出版

## 考古学から見たごみ問題

—ごみ捨て場は宝の山?—

菊池 徹夫 (早稲田大学名誉教授)

### はじめに

第1~4講に学ぶ

自己紹介と第5講の要点

### 1. 現代とごみ、あれこれ

1 災害ごみをめぐって

- ・東日本大震災、鬼怒川洪水のガレキ
- ・「瓦礫」という言葉 「瓦や瀬戸欠け(貝殻?) ガラガラガラガラ」
- ・石と煉瓦の文化 vs 土と木の文化
- ・岩手、宮城そして福島 of 被災ごみ (汚染物と高レベル放射性廃棄物)

2 ごみとは何か? 「ごみ屋敷」に考える

3 遺物かごみか (ナショナリズムと考古学)

4 世界遺産とごみ、観光ごみ、海ごみ (海洋汚染)、宇宙ごみ

### 2. 考古学の資料と方法

1 謎の遺物プルトップ

2 コーラ瓶の考古学

3 モンテリウス (1843~1921、スウェーデン) の型式学の考え方

### 3. ごみ考古学 (Garbage Archaeology) の手法と成果

1 考古学の資料 物質文化を集める科学 (動物、植物、鉱物・・・)

2 考古学の手法 犯罪捜査、鑑識、科学捜査との類似

3 環境考古学の発展 自然遺物研究の進展 生物学、動・植物学との協力

4 顕微考古学、フローテーション、種子、花粉分析、DNA、トイレ考古学

5 三内丸山の成果、江戸考古学の成果

#### 4. 貝塚のはなし

- 1 日本の考古学は貝塚から始まった。
- 2 貝塚集落こそ縄文的定住生活の証拠
- 3 貝塚は臭かった？ 五感の考古学と見えない遺物
- 4 貝塚はごみ捨て場？ アイヌのイオマンテと「送り」の思想

#### 付 世界史の中のごみ

インダス文明、エジプト文明、ギリシャ、エーゲ文明、ローマ時代、ポンペイ遺跡、中国文明、中・近世のヨーロッパ

#### おわりに

もう一度、福島「放射性汚染ごみ」について

# ミニギャラリー

※神奈川県埋蔵文化財センター提供。講義では扱いません。

横浜市南区の稲荷山貝塚は、2000年に発掘調査されました。縄文時代後期の貝塚からは様々な「ゴミ」が出土しましたが、そのうちで様々な貝殻を写真で紹介します。横浜の根岸の縄文人は何を食べていたのでしょうか。



シオフキ

今でも潮干狩りでとれますが、砂が多いのでたべにくい貝です。



アカニシ

サザエに似ています。



イボキサゴ

1 cm以下の小さい貝。身は小さすぎるのでスープにしたのでしょうか。



ハマグリ

今では、東京湾ではほとんどとれません。



サルボウ

赤貝と似たもので、食感も似ています。



マガキ

牡蠣もたべていたとは



バイ

今でも楊枝をいれて身を回して引き出して食べます。



平成 27 年度 考古学ゼミナール

考古学から見た「ゴミ」事情

発行日 平成 27(2015)年 10 月 17 日

編集・発行 神奈川県教育委員会 教育局生涯学習部 文化遺産課  
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)

郵便 232-0033 横浜市南区中村町 3-191-1

電話 045-252-8661 FAX045-252-8663